

【今回の1冊】 岡裕人 (2012)

『忘却に抵抗するドイツ —歴史教育から「記憶の文化」へ』(大月書店)

【概要】 第二次世界大戦時、ナチス支配下でのホロコーストにより600万人が犠牲になったとされ、甚大な戦争被害はヨーロッパの周辺国にも及んだ。戦後ドイツにおける過去との取り組みは、東西統一や欧州統合を始めとした国内外における歴史の変遷に影響を受けてきた。本書では、未来に過去の記憶を伝えていくためのドイツの努力と試行錯誤が多方面から紹介され、「人は何のために記憶するのか」を考えるきっかけを与えてくれる内容となっている。

**はじめに**

「ドイツにおいて過去の歴史や記憶について考えるとき、ここ半世紀にわたり、それはまずナチスの戦争犯罪やホロコーストのことを意味してきた(p.3)」

→ここでの記憶とは、ドイツの社会や国民が運命共同体として過去の特定の出来事に対して共有する記憶のこと。周囲9か国と隣接するドイツでは過去と向き合うことが不可欠。

【過去の克服】：ドイツが戦争で犯した罪や過ちを認めて謝罪し、その責任のもとで戦後補償を続けることで当該国との関係を修復し、さらに良好な関係を築くため、負の過去と正面から向き合うこと。

→学校の歴史授業では、特にナチスによる独裁と戦争犯罪・ホロコーストに比重が置かれた。結果、今ではドイツの実践が各国からの模範とされるまで評価。しかし、過去の克服とは、問題となる出来事にとりくむだけでなく、その過去の出来事に対する記憶にとりくむことでもある。記憶と歴史認識をとりまく状態は変化し、その時代、その国、その国民の思いや価値観が込められ、同一ではないため。

→現代ドイツをとりまく状況は変化(統一ドイツ / 欧州連合と国際情勢 / 移民 / 戦後世代)

**第1章 学校や市民社会**

ドイツの歴史教育…「過去の克服」と結びつく。

- 生徒に考えさせる「問いかけ」(e.g.ナチスの独裁とドイツ国民の関わり：大衆の関与)、自分たちで調べて発表させる方式
- マイナス面…「世界史」がないため他地域への学びが薄い(「歴史」という教科のもとでドイツ史を中心とした歴史を学ぶ)

第二次世界大戦から時が経ち、第三帝国時代が相対化されてきた現状がある。

- 他の時代やテーマも重要となってきた(分断、統一、EU統合)

**第2章 記憶は変わる**

戦後、東西ドイツとで異なった記憶と歴史認識が存在した。

➢ 西ドイツ

- ◇ 1950年代末まで関心が低かった(戦後復興のため、民主化促進と同時に、当時の世論に配慮しつつ旧ナチ関係者の社会復帰を優先した)、「時刻ゼロ」教育
  - 「当時のドイツ人には戦争の被害者としての意識をもつ人が多く、世論もそれに同調した。戦争責任はすべてナチスに押しつけ、自らの過去の責任には目をつぶった(p.66)」
- ◇ 1950年代末からナチスの犯罪に取り組むようになる(反ユダヤ主義事件と歴史教育ガイ

2014年1月10日(金)

第7回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス  
東京大学大学院総合文化研究科修士課程 石原遥 readingcircle@hsf.jp

ドライン、アウシュヴィッツ裁判、追悼記念施設など)

- ◇ 1960年代:「68年運動」(既存の政治体制に対する大規模な抗議運動)  
→戦後生まれの若い世代がナチスの過去を厳しく批判、過去とのとりくみをめぐって親の世代と激しく対立し、過去を直視することを訴える(p.67)。
- ◇ 1970年代:「新東方政策」による記憶の政治化、メディアの影響による大衆の意識喚起。
- ◇ 1980年代:「歴史家論争」(ホロコーストは歴史上の他の事件と比較可能であるか否か)  
→結局、ホロコーストが戦後ドイツ民主主義の原点であり、ナチスの過去を記憶し反省することはドイツの国家基盤にかかわる重要事項との結論づけ。
- 西ドイツでは「68年運動」をきっかけに、1970年代から80年代にかけて「過去の克服」がおこなわれ、それと結びついた歴史教育が確立していった。

### ➤ 旧東ドイツ

- ◇ 反ファシズム主義のドイツ人によるヒトラー独裁の打倒という、建国神話。
- 1990年代、歴史認識の異なる東西ドイツ統一により二重の過去の引き受けが起こる(だが消えていく旧東側の歴史)。またホロコーストがヨーロッパ全体の罪として認識されるようになったことから、ヨーロッパ全体で「記憶の文化」を作っていこうとする動きが起こる(p.77-78)(1992年にはユネスコによる「世界の記憶」事業が始まり、「記憶」に注目が集まる)。一方で、ヨーロッパ統合により、共通のアイデンティティ形成・地域間での相互理解が不可避となったことから共通の記憶の文化を生み出そうとしている。

## 第3章 記憶と対話

教科書対話(「記憶の文化」の醸成)

- 効果:教科書対話とその議論を通じて、市民社会が政治的に成長(範囲:ドイツ、ポーランド、フランス、チェコ、イスラエル、ヨーロッパ全体)
- ドイツーポーランド(勧告)、ドイツーフランス(二国間共通教科書)
- 被害・加害関係見直し、より広範囲から自己の捉え直し(ヨーロッパ史・グローバルなど)

## 第4章 記憶と未来~課題と挑戦~

- ドイツで「ヒロシマの記憶」を「人間全体の記憶」として伝えていく試みが行われた。  
→未来への責任のために人は記憶する(ドイツ語「記憶する:erinnern」=「心に刻む」)
- 「良心的兵役拒否」から国防改革による兵役廃止(2011)  
→兵役拒否時には「社会奉仕役」(福祉・医療・教育・自然保護 etc での貢献)が課されていたが、兵役廃止によって新たな矛盾が生じている(1. 廃止により平和について考える機会や公共福祉に貢献する体験学習が消滅、2. 国内の労働力不足、3. 集団安全保障や国際貢献のための国外派兵)
- 移民の統合  
→移民は、少子化が進行するなか受け入れと統合は避けられないがドイツ社会の将来とも関わる(貧困・教育・年金・外国人問題との関係)。また「自分は何者なのか」といったアイデンティティ(個人の記憶)の苦悩も「移民の背景をもつ人々」にはつきまとう。2005年の「移住法」施行により主張変化が起こり、新たな取り組みも始まっている(移

<sup>1</sup> ドイツに住む5人に1人が移民とされる。移民のルーツとしては、①出稼ぎ労働者と家族統合(1955-1970)、②難民・亡命者、③逆移民・ドイツ系帰還者(1990年代)、国際結婚、子孫 etc

2014年1月10日(金)

第7回「人間の安全保障」読書会 於 東京大学駒場キャンパス  
東京大学大学院総合文化研究科修士課程 石原遥 readingcircle@hsf.jp

民統合事業の試行錯誤、記憶や価値観の共有)が、ダブルのアイデンティティとヨーロッパ・アイデンティティをどう考えればよいか。

- 学校教育現場での苦悩  
ナチス時代のドイツ史の視点⇔地域の歴史から学ぶ姿勢  
「歴史を自分の問題として捉えるには、家族の記憶や地域の歴史といった身近な歴史に取り組むことが大切だ (p.169)」
  
- ドイツにおける3つの統合(旧東ドイツとの統一、ヨーロッパ、移民)  
→個々の記憶を集団の記憶、社会の記憶、国民の記憶(+国家や人類全体の記憶)として大きな「記憶の文化」を育む必要がある(「記憶の文化」: 集団の記憶とその記憶を表現するものすべての総合体 (p.183))。  
→記憶の文化は社会や国(政治)を動かす力となり、記憶は未来への責任や使命を孕む。
- ドイツの若者は、意識調査で戦争責任を「自分個人が負うべき罪や責任だとは考えていない」。戦争を経験した世代から数えて第4世代の若者が、心理的に離れた立場で「ドイツの過去」を受け止めている現状がある (p.173-174)。
- 日本での記憶をめぐる意識、「記憶」をどう行うか(ヒロシマ・ナガサキ・フクシマ etc) 意味の再構築が必要であり、「記憶の文化」をつくる必要

●多様化する「過去」と移り変わる「記憶」に対し、“忘却に抵抗する (Gegen das Vergessen)” 努力が各地で行われている。

#### 《論点にしたいこと》

- ・生き証人がいなくなってしまう中、平和教育の今後のあり方は。(以下2つの文章への共感)  
p.48「過去の事実を包み隠さず直視することは大切だが、あまりに残酷なものを繰り返し見ると、嫌悪感だけが大きくなる」  
p.56「われわれの世代は、もはや個人としては過去の罪に責任はありません。しかし、自分を“ドイツ人”と集合的に呼ぶのであれば、過去のドイツ人が犯した罪から逃れることはできないでしょう」
- ・「記憶をグローバル化し、人類全体で共有すること (p.86)」はどこまで可能なのか。

\*ドイツの例だけでなく、参加者の皆さんのこれまでの経験などをもとに、幅広い地域や事例から「記憶」の問題について意見交換ができればと思います。